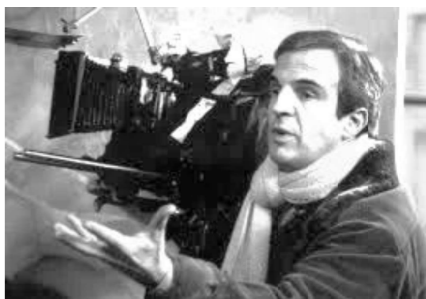




有田誠(ありたまこと) 京丹波町在住の映画愛好家
写真は、ロサンゼルス・ハリウッド周辺(筆者撮影)



フランソワ・トリュフォー (1932~1984)

フランソワ・トリュフォー

ジャン・リュック・ゴダールとともにヌーベル・バーグ(新しい波)のスター監督として生き急いだフランソワ・トリュフォーは、一九八四年、五二歳で亡くなった。その前年、パリの街角で、ポツンと一人立つトリュフォーを見かけた。話しかけなかったのが、今に至るまで悔やまれる。その轍を踏むまいと、寺

のである。例えばエドワード・ドミトリクの『十字砲火』(一九四七)。ユダヤ人差別にこり固まった軍人(ロバート・ライアン)が殺すユダヤ人は、沖繩で戦ったと言う。これが日本で公開されたのは四十年後の一九八六年である。ジョセフ・マンキウィッツの『記憶の代償』(一九四〇)も沖繩戦で負傷した記憶喪失の男が主人公。エリア・カザンの『影なき殺人』(一九四七)の無実の殺人罪に問われる青年(アーサー・ケネディ)は帰還兵で、自分の居場所がなく職を捜して転々とする。ジョージ・マーシャル『青い戦慄』(一九四六)は召集解除になったアラン・ラッドが家に帰ると、妻は別の男に取られ、その妻が射殺され、容疑者にされて

町二条でポール・マツカートニーと遭遇した時は、相手の迷惑もかえりみずほんの少し立ち話ができただけ。トリュフォーは、『大人は判ってくれない』(一九五九)、『二十歳の恋』(一九六〇)、『夜の霧の恋人たち』(一九六六)、『家庭』(一九七〇)、『逃げ去る恋』(一九七〇)と、いわゆるアントワヌ・ドワネルもを撮りつづけた。自らの不幸な少年時代を重ね、感化院に送られるアントワヌを、ジャン・ピエール・レオが三十代に至るまで演じた。大人になるにつれ、レオがトリュフォーにそっくりになっていく奇跡のよう

な連作である。

フィルム・ノワール

二十世紀フォックスが中心となって開拓した犯罪映画のジャンルがフィルム・ノワール(暗黒映画)と呼ばれている。戦後のアメリカ社会の重

苦しさを背景とした暗く悲観的な映画群で、五十年代後半までつづいた。アメリカの研究本では、何と四九〇本がフィルム・ノワールとして挙げられている。エドワード・ウィルマー監督の『恐怖の回り道』(二

九四五)が始まりとされている。ヒッチハイクでニューヨークからロサンゼルスまで行くピアニストに不運が次々と重なる。ついに女を殺してしまいが、捕まりもせず、さまよいつづける。ハッピー・エンドの対極で、検閲を担当する米国映画協会は評価に困り果てた。主演のトム・ニールは、その後、本当に人を殺して服役した。アン・サベージの演じた役ほど性悪で不機嫌な女を、筆者はスクリーンで見た記憶がない。

フランスの事情

戦争で荒廃したフランスは、自力で興行をつづけるだけの作品が製作できなかった。折しも終戦直後、ガリマール社は、セリ・ノワール(暗黒叢書)の刊行を開始する。大量のアメリカ犯

フィルム・ノワールと戦争

素人が金欲、色欲で行動して失敗、悪い女にだまされ、最期は殺される。夜のシーンが多く、壁にうつる大きな影が不安を強調する。こんなアメリカ映画を日本人に見せてはいけなかった。

しまう。レイモンド・チャンドラーの書き下ろし映画化である。当たり前だが、アメリカ人も戦争でポロポロになっていたことが、フィルム・ノワールにきっちり記録されている。戦争があったという事は、隣所にPTSDや人を殺した男がいつぱいいたということだ。今もアメリカの変わらないところである。

トリュフォーの三本

『死の接吻』(一九四七)のリチャード・ワイドマークの強烈さも、戦後アメリカの病巣から生じたものだろう。何せ車椅子の老婆を電話コードで縛り、階段から突き落とすのである、笑いながら。ウィリアム・ワイラーのアカデミー賞作品『我等の

生涯の最良の年』(一九四六)で終戦直後のアメリカ社会を見てしまうと、かなりの誤解が生じるだろう。フィルム・ノワールに分類できる映画を、トリュフォーも六十年代に三本撮っている。ただし三本とも失敗作。遺作となった『日曜日が待ち遠しい!』(一九八四)も、チャールズ・ウィリアムズのサスペンス小説『土曜を逃げる』(一九六三)の映画化だが、これは別格。映画を撮ることの至福感に溢れた傑作だと思う。

彼の三部作は、コーネル・ウールリッチ原作(一九四〇)の『黒衣の花嫁』(一九六七)、ウールリッチの別名ウィリアム・アイリッシュの原作(一九四七)の『暗くなるまでこの恋を』(一九六九)、デ

ビッド・グーデイス原作(一九五六)の『ピアニストを撃て』(一九六〇)である。『トリュフォーに暴力は描けない』母親からの愛情欠如、そこから生じる不安ゆえに女性を追い求めつづける堂々巡りが、トリュフォーの世界である。フィルム・ノワールの感覚は、女性への憧憬へと変化し、犯罪性やサスペンスとかけ離れてしまう。トリュフォーは、他者(多くは女性)との接触を求め、ステイブン・スピルバー

グは、さすがと言うか、『未知との遭遇』(一九七七)で、超巨大UFOで地球にやって来た宇宙人と何とか接触、交信しようとするフランス人科学者ラコム博士をトリュフォーに演じさせた。その作品に感動した『華氏四五二』の作者レイ・ブラッドベリーは、スピルバーグを『養子』にしたいと申し入れたらしい。トリュフォーは、イギリスで『華氏四五二』も映画化している。これも失敗作だと思う。



極右ルペン(父)のポスターがあふれるパリ (1983年筆者撮影)

なお、『黒衣の花嫁』を山本周五郎は、『五瓣の椿』でそっくり時代小説に置き換えている。松竹でジャンヌ・モローの役を岩下志麻が演じ、野村芳太郎が六四年に映画化した。これも失敗作であった。